

# 曲目解説

## ♩メンデルスゾーン 序曲「フィンガルの洞窟」Op. 20

1829年の春、初めてのスコットランド旅行をしたメンデルスゾーンは、ヘブリデス諸島のスタッフファ島でフィンガルの洞窟を見た。その際の着想を翌年のイタリア旅行中にローマで、管弦楽曲に仕上げたのがこの曲である。1832年5月、ロンドンで彼の指揮で初演された。

曲は、岩に寄せる波のうねりを思わせるメロディーで始まり、このメロディーが曲全体を通して聞こえてくる。木管による風とかもめのメロディーと、次いで大きく口を開いた岩窟が生物でもあるかの様な描写が続く。三様のメロディーが錯綜し、曲は大きく展開し力強く終わる。

## ♩オネゲル 交響詩「夏の牧歌」

「私は夏の曙を抱いた」と言うランボーのエピグラフに影響を受け、さらに1920年夏のスイス滞在中その田園風景に動機を得て作曲された。1921年度のベルレイ賞を受け、彼の作品の中では比較的軽快な筆致による作品と一般的には認められている。曲は題目から何らかの文学的な、又は絵画的な連想を持たれがちである。がしかし、描写的な部分は全くなく、全体を通して表現は「音楽のための音楽」と言えるかも知れない。オネゲルの作品の中では、最も多く上演される作品の1つである。

## ♩モーツァルト ピアノ協奏曲第15番変ロ長調K. 450

1784年の春、ウィーンでK. 451、K. 453のピアノ協奏曲と共に作曲されたもので、これら3曲は一連の姉妹作となっている。モーツァルトにとっては、ウィーンで最も成功をおさめた時期の作品にあたる。この頃、彼が父に送った手紙に「僕はこの2つの協奏曲（K. 450、K. 451）に優劣を付けることは出来ません。どちらも汗をかかせる協奏曲だと思います。しかしより難しいのは二長調（K. 451）より変ロ長調（K. 450）のほうだと思います」とある。この曲は、独奏部のパッセージが技巧的で、彼自身のソロの為に作られている。初演はこの年の3月24日、トラットナー家でモーツァルト自身の独奏で行なわれた。

## ♩ベートーヴェン 交響曲第5番ハ短調Op. 67「運命」

「苦悩を貫いて歓喜に至れ。」これはベートーヴェンが、生涯を通じて座右の銘とした文句である。彼が音楽によっていったい何を人間に訴えようとしているのかがわかる。『ミサ・ソレムニス』の中には、「心より出でたるものは、出来得れば再び心に返らんことを願う」と祈りの言葉が示されている。彼の終世変わることのない人間愛を感じずにはいられない。弟子のシントラーに答えて、彼は第1楽章を開始する4つの音を「運命はこの様に扉を叩く」と説明している。ベートーヴェンにとって「運命」とは何なのか、私は考えたい。

第1楽章は、4音の「運命の動機」が全体を支配している。がこの4音がどのような性格を持っているのか明らかではない。しかし、確かにそれは人間を動かすものである。第2楽章は、優しさとしなやかさによって支えられている。第3楽章では、不安感と信頼感とが入り混じり苦悩している彼が浮び上がる。楽章の後半では一層緊張感を増して、彼自身この運命がたどり着くその行く先に沈黙しているかの様だ。やがてティンパニの連打と共に、ハ長調のブリッジ・パッセージがフィナーレへと突き進む。第4楽章になって、勝利した激情はしかし秩序をもって表われる。自信と安心感が同居しつつ曲はクライマックスへと進む。その中には、彼が生涯望んで得ることの出来なかつた安らぎも見い出せる。エンディングは壮大に締め括られている。

『運命』は、「苦悩を貫いて歓喜に至れ。」と私に語りかけてくる。がベートーヴェンの一生を回顧した時、私達は現実と理想のこれ程までに大きく掛け離れている事に驚かされる。彼は、人間一人一人が苦悩を克服して完成された個人になり得ると信じていたのである。言わばこの願望は、オプティミスティックな感傷である。と非難を受けた時代もあった。が現在『運命』の力強い生命力は、時代を超えて私達を歓喜に導いてくれる。

（藤井部 勉）